

再録「わが国最大の生息地か？万之瀬川河口のハクセンシオマネキ」

柳田一郎

〒 890-0034 鹿児島市田上 5-16-34

■ はじめに

私は文学という方法を使って、郷土の自然情報を全国に発信しようと考えています。このことについては、「Nature of Kagoshima, 36: 33-36」において報告させていただきました。そのきっかけのひとつとなったのは、以下の報告文でした。この演劇風(?)の報告文をある機関誌に掲載し、その内容が全国の河川技術者の方々の目にとまり、成果につながりました。それは、現在の「万之瀬川河口干潟」(南さつま市加世田)の天然記念物(国)指定や県立自然公園特別地域への編入のきっかけとなったことは間違いないでしょう。

その経緯は「Nature of Kagoshima, 34: 21-23」で報告させていただきました。残念ながら、この報告が掲載された「他自然研究」という河川技術の全国的機関誌は、今はありません。自らの活動のきっかけを探る中でたどり着いたこの報告文を、改めて公開させていただきたいと考えます。文学(文章)力を思い知り、以後の文芸活動につながった報告文です。なお、同時に掲載されていた写真については、著作権の関係で省略しています。

■ 「わが国最大の生息地か？万之瀬川河口のハクセンシオマネキ」

鹿児島県南西部、薩摩半島の加世田市と金峰町の境を東シナ海に注ぐ「万之瀬川」の河口には広大な干潟が広がる。毎年五月の連体には、この河口と付近の砂浜で吹上浜砂の祭典が開催される。今年は砂の彫刻世界選手権大会も行われ、例年を超える十三万人あまりの人々が、巨大な砂の芸術を楽しんだ。この河口には、毎冬、世界的に希少な鳥クロツラヘラサギが十数羽訪れるなど、

野鳥の宝庫となっている。川岸には、隣接する都市公園・県立吹上浜海浜公園の野鳥観察舎も設置され、全国の愛鳥家が集まる。

今年の砂の祭典でも、この自然環境を生かして、地元ボランティアによる自然観察会や野鳥観察会、メイン会場での環境問題の展示会なども行われた。中でも、「ハクセンシオマネキと干潟の自然観察会」は2日間にわたり、遠くは福岡や長崎からの参加者も含め、延べ30家族が参加する行事となった。

河口の広大な干潟におけると、シギやチドリ、トビやツバメなど鳥の声が聞こえてくる。初めて川の中に降りる子供達は興奮気味である。砂に足をめり込ませながら歩く。すぐに足元の大小様々なカニの巣穴に気づく。

熊本から観察会に駆け付けた講師の先生の「静かに！よく見てごらん」の声。

立ち止まって、ドキドキしながら待っていると、あちこちで白い点が動いている。

「あの動いてる点のほとんどが、ハクセンシオマネキと言う小さなカニです。オスのハサミの片方が大きく、メスを呼んだりする時にこの大きなハサミを振ります。まるで、引いていった海の水を、帰っておいでと呼んでるみたいに見えますから、昔の人が『白扇潮招き』という素敵な名前を付けてくれました。」

「さあ、近づいて見てみましょう。」

さらによく見ると、干潟のずーっと奥の方まで、白い点が沢山延々と続いている。歩きだすと、その点が動き出し次々と穴に消えていく。改めてその数の多さに気付く。

「数えたところ30万匹を超えました。国内でも最大級の場所だと考えます。」

「最大」の言葉に、驚きの声があがる。

身近な場所に、そんなにも沢山の生き物の宝庫があることに初めて気がつく。みんなその場にしゃがみこんで、穴の回りを静かに掘り上げ、カニの暮らしを観察する。つまみあげないで、手の平にそっと乗せるとハサミで挟まれない事も教わる。

「もう一度、周りをよく見まわしてください。何か気付きませんか。」

立ちあがって先生が指差す方を見ると、緑の葉をつけた大きな木が広がっていることに気付く。

「ハマボウの木です。自然の状態で、これだけの固まり、『群落』と言いますが、見られるという事も素晴らしい事です。ここには、一千本を超えるハマボウの木があります。このハマボウが、流れてくる泥と砂を丁度よい具合に溜めて、ハクセンシオマネキが暮らしやすい干潟と環境を作ってくれます。クロツラヘラサギやマガモのような野鳥達を他の動物や人の目から守ってもくれます。」

直径十mもあろうかというほど丸く大きく枝を張ったハマボウの間を歩く。

「六月から、七月にかけて大きな黄色い花を咲かせます。とても綺麗で華やかですから、ぜひ見てください。」

参加者の一人で地元の小学校の生徒さんが、初夏の花の美しさと秋の紅葉の様子を回りの人々に説明し始めた。

「すごく綺麗だから、絶対見に来てよ」

誇らしく嬉しそうな姿に、先生も目を細める。

「ハクセンシオマネキのすむ干潟を守るには、このハマボウの群落を守っていくことも大事です。」

ハマボウの林を通り抜けると、そこに堤防が現れる。作られた時代の違いのためか三段に見分けられる。その最も古いと思われる一番下の堤防を観察する。

「大きな石が積んである」、「曲がっている」、「穴が多い」、「違うカニがいっぱい」、「変な虫がいっぱいいる（フナムシ）」、と大人も子供も口々に叫ぶ。

古い時代の堤防を目の当たりにする。自然観察会の最後は、先人の治水の知恵を学ぶ時間となる。

「この曲線が、上手に水の力を受け止め分散してくれます。どうやらなん十年も頑張ってくれている堤防のようです。」

みんながどよめく。

「堤防の前には、ハマボウの木があります。強い水の力を、まず干潟とハマボウの木達が受け止めます。次に曲がったように見える堤防がとても上手に水の力を受け止めます。こうして堤防は壊れずに町を守ります。」

自然観察会は、自然から人の営みへ、利水と治水へ、そして人と自然が共に生きるために必要な配慮について話が進み、拍手とともに終わる。

ハクセンシオマネキの暮らすこの干潟は、さらに日本産ハマグリの南限地であることや海浜性の珍しい昆虫の生息地であるなど、話題にことかかない。

総合的な生態調査が、あるいは新たな発見を生み、この川と干潟の貴重さをさらに教えてくれるであろう。

出典：「他自然研究 第104号 2004.5」財団法人リバーフロント整備センター（当時）発行。

Nature of Kagoshima 39: 229-230